

自由銀運動の比喩としての「オズの魔法使い」

松岡和人

地域社会システム講座

“The Wonderful Wizard of Oz” as a Allegory of Free Silver Movement

Kazuto MATSUOKA

Department of Regional and Social Systems, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

「オズの魔法使い」(The Wonderful Wizard of Oz)は、1900年にボーム (Lyman Frank Baum, 1856-1919) が発表した有名な童話である。しかしそれはアメリカで愛されている童話というだけでなく、19世紀末アメリカの自由銀運動の比喩という側面をもつ寓話であったといわれている。何よりオズという魔法使いの名前自体、金の重量を測る単位であるオンスをそのまま意味している。本稿は、一連のオズ・シリーズの中心的存在である「オズの魔法使い」が暗示した自由銀運動について、19世紀末のアメリカの経済状況などを踏まえながら検討しようとするものである。なお、ここでいうアメリカの自由銀運動 (free silver movement) とは、19世紀末のいわゆる本位制論争 (battles for the standard) において金銀複本位制 (bimetallic standard) を主張したグループのことを指している。また、本位制論争は本来、自由銀運動と金本位制論者の間の論争を指すが、フリードマン (Milton Friedman)⁽¹⁾ らが指摘しているように、イギリスの論争ほど両者に大きな違いはなかったと思われる。

アメリカは1873年に事実上金本位制 (gold standard) へ移行したが、それは多くのヨーロッパ諸国が金本位制を採用したのと同じ時期であった。1816年にイギリスが金本位制に移行した時、ヨーロッパではほとんどの国がそれまでの金銀複本位制を続けていた。当時イギリスが国際貿易、国際金融の中心国であったことを考えると、各国が金本位制を採用することは時間の問題であったが、ヨーロッパ諸国はすぐに金本位制を採用したわけではなかった。1860年代には金銀複本位制などの継続可能性を探る動きがみられたのである。つまり、国際金融の中心国と同じ金本位制を採用すれば為替レートの安定などのメリットが享受できることはわかっていたが、金銀複本位制のメリットも棄てがたかったということになるだろう。このようにヨーロッパでは、金銀複本位制を維持しようとするラテン貨幣同盟や、別の単本位制を模索するスカンジナビア貨幣

同盟、ドイツ・オーストリア貨幣同盟などが誕生した。これに対してイギリスは、イギリス・アメリカ間の金本位制を目ざす、アングロアメリカ貨幣同盟案で対抗した⁽²⁾。このように、結果的には金本位制に落ち着くことになったとはいえ、ヨーロッパでは金本位制と金銀複本位制を巡る論争が活発に行なわれた時期があったといえる。

ヨーロッパでのこのような状況に対してアメリカでは、事実上金本位制に移行した1873年以降も金本位制と金銀複本位制間の論争が続くこととなった。本稿では、この本位制論争における自由銀運動に対して、ボームは「オズの魔法使い」の中でどのような比喩をしたのかを探っていききたい。

具体的には本稿の構成は以下のようになっている。まず第一節と第二節で自由銀運動の背景にあたる部分について簡単にみておきたい。第一節では、金銀複本位制ではあるが実質的には銀本位制であった時代について考える。第二節では、事実上の金本位制が始まるまでについて検討しておきたい。第三節では、ボームの考えた自由銀運動の比喩について、まず一般的な比喩解釈を紹介しておきたい。第四節から第六節までは、実際の自由銀運動などについて言及しながら、「オズの魔法使い」の内容について検討していきたい。第四節では、「オズの魔法使い」第1章における比喩について考察する。第五節では、「オズの魔法使い」第2章から第11章までの比喩について考察する。第六節では、「オズの魔法使い」第12章から第24章までの比喩について考察する。そして第七節では、比喩について、見解が分かれるものについて検討したい。

1. 1830年代までの問題

19世紀初頭以来、アメリカは西部開拓や産業革命による好景気を経験したが、一方ではそれを支えるはずの銀行の脆弱性が露呈することもしばしばあった。第一節では1830年代までに現われた数多くの問題のうち、次の二つの問題を指摘しておきたい。一つは、銀行券の過剰発行問題、もう一つは金銀法定比価と金銀

市場比価の乖離問題である。

1810年代、アメリカでは州法により設立免許をうけた州法銀行（state bank）が乱立し、州法銀行券が過剰供給された。これに対して1816年、自ら政府紙幣を発行する中央銀行的機能をもった第二合衆国銀行（Second Bank of the United States）が設立され、州法銀行券の過剰発行を抑えようとした。しかし、1820年代後半には中央銀行制度に反対する分権主義が台頭し始め、1829年に就任したジャクソン（Andrew Jackson）大統領の反対もあり、結局第二合衆国銀行は1836年に州法銀行への転換を余儀なくされた。一方、州法銀行はその数を伸ばし、当時10%前後といわれた正貨準備率を守らずに州法銀行券を乱発したと推測される⁽³⁾。

一方、当時のアメリカが採用していた金銀複本位制は、交替本位制（alternative standard）とよばれるタイプのものであった⁽⁴⁾。そのメカニズムは次のようなものである。まず、金、銀の自由鑄造を仮定しよう。一般に、金銀法定比価と金銀市場比価に乖離が生じると、金銀法定比価で過大評価された鑄貨が流通し、過小評価された鑄貨は流通から消えることになる。しかし裁定取引が発生して両比価が一致するようになると、この金銀複本位制はうまく機能することになる⁽⁵⁾。したがって金銀複本位制といっても、一方の鑄貨（たとえば銀貨）が過大評価されている限り、そのシステムは銀本位制ということになる。その当時は、

金銀法定比価は15.0：1で、金銀市場比価は15.8：1であったため金貨の過小評価であった。そして371.125グレインの純銀を1ドルとする事実上の銀本位制の状態となっていた。つまり、銀貨だけが流通する金銀複本位制が続いたのである。

これらのことをグレシャムの法則（Gresham's Law）から説明することもできよう⁽⁶⁾。複本位制の場合、良貨（金貨）は熔解、退蔵、輸出⁽⁷⁾されてしまうため流通しなくなり、悪貨（銀貨）だけが流通し、価値尺度として機能することになる。

いずれにしても、銀行券の過剰発行問題、および金銀法定比価と金銀市場比価の乖離問題に対して当時多くの議論がなされたことは想像に難くない。ここでは、ゴウジ（William M. Gouge）の见解を紹介しておこう。ゴウジはこの15.0：1という金銀法定比価を続けている限り金貨は流通しないということを認めつつも、フランスを例にあげて、金銀法定比価が金貨を過小評価していても長期的にみれば裁定取引が働くため大きな問題ではないと考えた。彼は、金貨が流通から消えた最大の理由は州法銀行の増加と州法銀行券の乱発であるとした（図1を参照のこと）。そしてゴウジは、健全な貨幣システムを構築するために必要なことは、新しい金貨の鑄造と銀行券の回収であるとしたのである⁽⁸⁾。

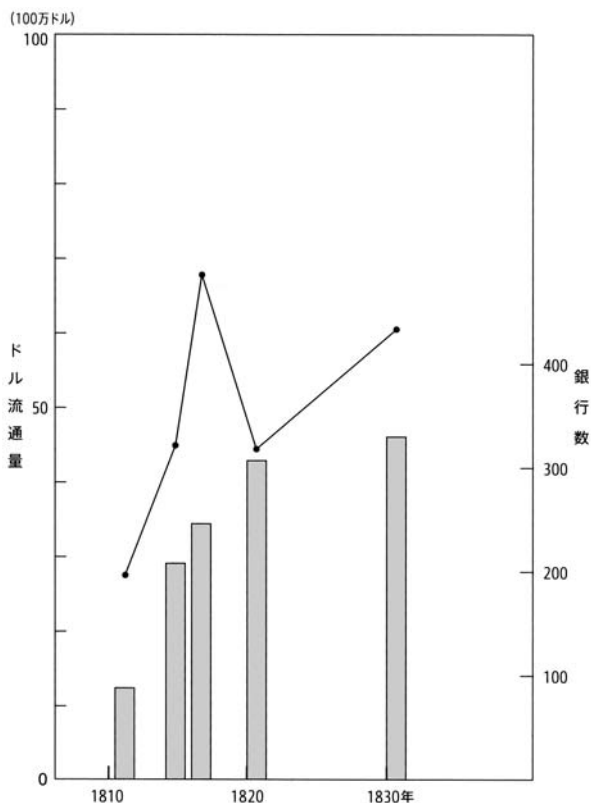
2. 事実上の金本位制まで

1830年代までにアメリカは、銀行券の過剰発行と金銀法定比価における金の過小評価という問題を抱えることになった。第二節では、その後の展開について、政府の対応を中心にみておこう。

まず銀行券の発行問題についてである。1830年代後半に州法銀行が相次いで倒産したため、それまでの州法銀行の営業特権に批判が集中し、営業の自由を求める動きがみられた。それは、自由銀行主義（free banking system）⁽⁹⁾とよばれるもので、1838年のニューヨーク自由銀行法に結実した。自由銀行法では、10万ドルの資本で誰でも銀行が設立できるとされた。そして銀行券を発行する場合は、100%の担保と12.5%の正貨準備などが要求されたのである。つまり、銀行の設立は容易であるが、銀行券発行は抑制されるということになった。

このように1840年代以降、州法銀行と自由銀行が銀行券を発行することとなった。しかし、銀行券の問題は再燃することとなった。有名なグリーン・バック（greenbacks）の登場である。南北戦争の戦費調達のため1862年に発行された不換政府紙幣で、緑色のインクで印刷されていたことからこのようによばれた。これは、第二合衆国銀行がなくなって以来の政府紙幣となったが、不換紙幣であったためいずれ回収の問題に直面することになった。

図1 銀行券流通量と銀行の数



* Gouge ([1833] 1835) A Short History ... pp. 60-61.

そこで、グリーン・バックにかわる全国共通貨幣を発行する必要性が高まった。その役割を担う形で登場したのが、1863年の国法銀行法に基づく国法銀行（national bank）であったといえるだろう⁽¹⁰⁾。

これによりアメリカの銀行は、国法銀行法により連邦政府から設立免許をうけた国法銀行と、以前からある州法銀行の二種類となり、二重銀行制度（dual banking system）が始まった。そして銀行券は国法銀行が発行することとなった。これらの結果、流通する貨幣の種類は大きく変わることになった。1860年は金貨と州法銀行券が90%以上を占めたが、1867年にはグリーン・バックと国法銀行券が70%以上を占めることになったのである⁽¹¹⁾。

ここで新たな問題が発生した。銀行券を発行する国法銀行は東部に集中し、銀行券を発行しない州法銀行が西部、南部に多かったため、銀行券供給の偏在が生まれたのである。これはまた、第四節で述べる農民運動を生む原因の一つになったといえよう。このように、いわゆる銀行券の分散発行の問題は、1863年以降も銀行券供給の偏在という形で続いたと考えられよう。ちなみに銀行券集中発行制度が確立したのは、1914年の連邦準備制度（Federal Reserve System）創設の時であった。

次に、金銀法定比価と金銀市場比価の乖離問題についてである。政府はまず、1831年に金銀法定比価を15：1から15.625：1へと変更した。次いで1834年には、イーグル金貨（Eagle）の含有純金量を247.5グレインから232グレインへ引き下げることにより、金銀法定比価を16.0：1とした⁽¹²⁾。

つまり当時の金銀市場比価に比べて、金の過大評価、銀の過小評価となった。しかし1840年代になって金が発見されると、金銀法定比価と金銀市場比価の乖離は拡大し、銀貨は流通しなくなった。このため、政府は1853年に銀の自由鑄造を停止し、本位貨幣であった銀貨を補助貨幣にしたのである。この時、将来金銀複本位制を放棄することが決まったともいえよう。実際これらのことは、1873年の貨幣法で正式に認められた。有名な「1873年の犯罪」（Crime of 1873）は、この貨幣法を批判する立場からのよび名である⁽¹³⁾。

3. 「オズの魔法使い」の一般的比喩解釈

ここで、「オズの魔法使い」を読みながら、ボーム⁽¹⁴⁾の意図した比喩について考えてみよう。はじめに、先行研究⁽¹⁵⁾が「オズの魔法使い」に含まれる比喩として代表的なものをあげておこう。ただし、見解の分かれる主要人物については第七節でとりあげたい。

表1をみてほしい。第六節まで、これらの比喩解釈を念頭に置きつつ、私見を交えながら「オズの魔法使い」の全24章のあらましを検討していきたい⁽¹⁶⁾。なお、ジュディ・ガーランド（Judy Garland）主演で1939年

表1 一般的な比喩解釈

O z	→ 金
ドロシー	→ 伝統的アメリカの価値
竜巻	→ 自由銀運動
銀の靴	→ 銀本位制
黄色い煉瓦道	→ 金本位制
エメラルドの都	→ ワシントンD C
かかし	→ 西部農民
ブリキの木こり	→ 工業労働者
ライオン	→ プライアン
赤いポピー畑	→ 阿片畑
緑色	→ 貨幣色
空飛ぶ猿	→ 平原インディアン
金の帽子	→ 金本位制
ウィンキー	→ フィリピン人

に映画化された「オズの魔法使」（この邦題には「い」がない）（MGM）も有名である。しかし、映画では原著にある内容の省略や変更がなされているため、自由銀運動の比喩という印象は弱まっている。

4. 第1章における比喩

まず第1章のあらましを提示し、そこから比喩されていることを考えてみよう。

（第1章）ドロシー（主人公）は、カンザスの大草原の小さな家でエムおばさん、ヘンリーおじさん、トト（犬）と暮らしていた。ある日、北風と南風がぶつかって竜巻が発生し、ドロシーとトトは家ごと遠くへ運ばれてしまった。

「オズの魔法使い」はここから話が展開していく。ドロシーは通常、アメリカの伝統的価値、すなわち正直、元気を比喩しているとされているが、もう少し一般化して普通の女の子の代表とする見解もある⁽¹⁷⁾。

また最近の研究では、ドロシーはリーズ（Mary Elizabeth Lease）という実在する人物を比喩していたのではないかとされている。彼女はカンザスの農民同盟（Farmer's Alliance）の大会において、政府は「ウォール街の、ウォール街による、ウォール街のための」⁽¹⁸⁾ものとなってしまったと演説したことで知られており、後述する自由銀運動の竜巻に巻き込まれたドロシーと重なるところが多いのである。さらに、リーズがKansas Tornadoとよばれていたこと⁽¹⁹⁾も考え合わせると、ドロシーはリーズの比喩と考えた方がいいだろう。

またトトという犬の名前は、自由銀運動を展開したアメリカ複本位連盟（American Bimetallic League）のスローガンである、金銀法定比価16 to 1ということばのtoからつけられたと思われる。

さらに、これはこの話全体にとっても重要な点であ

るが、主人公が巻き込まれた竜巻は、自由銀運動を比喻していると考えられるということである。自由銀運動というのは、当時世界最大の産銀国であったアメリカの銀生産者を中心に始まった。この点を検討しておく。

自由銀運動は、グリーン・バック運動（green backs movement）の流れをくむものであると考えられる。もともとグリーン・バック運動は、貧困に苦しむ農民と失業した工業労働者を中心とした、貨幣供給量不足に反対するという活動であった。前述したように、南北戦争の後、政府はグリーン・バックを回収しようとした。さらに、1873年に正貨を金に限定したため、貨幣供給量の不足が表面化することになった。しかしながら、国法銀行券の増発も期待できなかった。なぜなら、国法銀行にとって発券は、担保として購入した国債の利子が入るだけで、その利子にも課税されたためメリットは少なかったからである⁽²⁰⁾。

貨幣供給量の不足は、デフレを発生させ、利子率を引き上げることになった。これらのことは、農民にとっては一層深刻な事態をもたらした。つまり、農産物価格の下落が止まらず、利子率が高いため資金を借りることもできない状態に陥った。また発券を担う国法銀行が東部に集中していたことも、西部、南部農村の資金不足を悪化させたと推測される。

このような貨幣供給量の不足に対して、農民たちは新たな貨幣を望むのではなく、回収中の不換紙幣グリーン・バックの増発を要求したのである。これは、兌換の再開を目ざす政府方針と明らかに対立した。このグリーン・バック運動には労働者も加わり、1874年にはグリーン・バック党を結成するまでその勢力を拡大した。この動きは資金不足に悩む資本家の賛同も得ることとなった⁽²¹⁾。これらの動きは政府の譲歩を引き出し、1879年にはグリーン・バックが兌換紙幣に加わるようになったのである。しかし1880年代に入るとグリーン・バック運動の勢いが衰え、それに代わるように自由銀運動が拡大していった。

銀生産者、通称シルバー・メンの要求は、グリーン・バックの増発にこだわらない貨幣供給量の増加であった。貨幣供給量の不足が原因であるデフレは、農民ばかりでなく、銀生産者にも甚大な被害を与えたのである。デフレがもたらした銀価格の下落に直面した銀生産者は、1873年の貨幣法を「1873年の犯罪」とよび批判した。彼らは、1853年以来途絶えていた、銀貨の自由鑄造の回復を要求した。つまり銀貨の本位貨幣への復帰を目指したのである。この運動が自由銀運動とよばれるもので、グリーン・バック運動同様、農民、労働者の支持を集めた。二つの運動の違いは、グリーン・バック運動がグリーン・バックの回収に反対し、その増発を要求したのに対して、自由銀運動の方は銀貨の本位への復帰、そして金銀複本位制への復帰までを要

求したということであろう。ただ、その結果として自由銀運動は、資本家の賛同は得られなかったと推測されよう⁽²²⁾。なぜなら、国際的に金本位制が主流となりつつある状況では、国際貿易を志向する資本家にとって金銀複本位制への復帰は時代の逆行と映ただろう。

勢力を拡大した自由銀運動は、銀の政府による買上げと国際会議による金銀複本位制への復帰という二つを要求した。前者については、1890年のシャーマン銀買上法（Sherman Silver Purchase Act）という形で結実している。しかし、1893年にシャーマン銀買上法が廃止になると、債務を負った農民、失業した工業労働者たちは、当時の民主党政権への批判を高めた。また後者については、1892年のブリュッセル国際貨幣会議において、アメリカは銀価格維持の最後の試みをしたが失敗している⁽²³⁾。

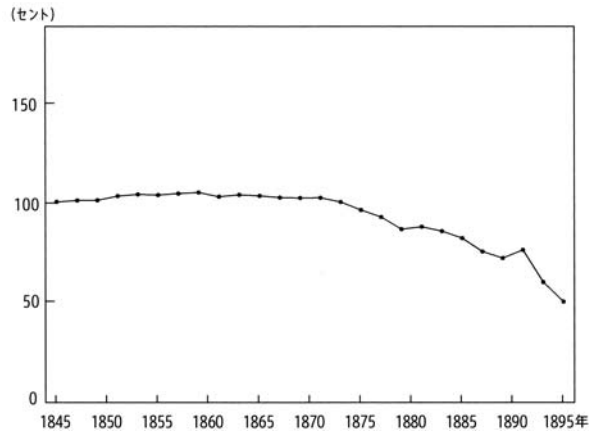
フリードマンらが、本位制論争における両派の主張の違いは小さいと指摘した通り、当時、共和党と民主党の主張に大きな隔たりはなかった。民主党のクリーブランド（Grover Cleveland, 1837-1908）大統領は、国際的合意があった時には複本位制を採用するという立場であったし、共和党も条件付きで両金属の使用を認めたのである⁽²⁴⁾。農民、工業労働者からは両党への失望感が生まれたと考えられる。

このような状況から、銀山所有者たちを中心にした銀の自由鑄造キャンペーンが行なわれたのである。それはまた、アメリカ複本位連盟⁽²⁵⁾や人民党（Populist Party）のキャンペーンでもあった。中でも、下院議員ブライアン（William Jennings Bryan, 1860-1925）⁽²⁶⁾がキャンペーン中に行なった演説は、「金の十字架」（Cross of Gold）の演説としてよく知られている⁽²⁷⁾。演説の中でブライアンは、銀の自由鑄造を訴え、金本位制は関税の何十倍も人を殺すことになるとした。当然のように、農民自由銀運動の代表者、正確には民主党銀派のブライアンは、1896年の大統領選挙の候補者に擁立されたが、資本家の支援を受けた金本位制論者のマッキンリー（William McKinley, 1843-1901）に敗れたのである⁽²⁸⁾。

参考までに、当時の銀価格下落についてみておこう。図2は純銀371.25グレインの市場価値の変化を表わしている。これによると下落は1880年代から顕著となっている。このような銀価格の下落は銀生産者を苦しめることになった。また銀価格の下落は、金銀市場比価の変化ももたらすことになった。図3はそれらを表わしている。金銀市場比価も1880年代から変化し、1895年には31.6:1という値まで示すことになった。

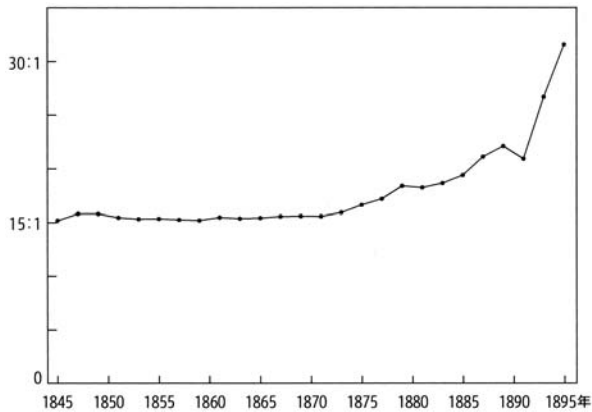
これらのデータを前にして、シカゴ学派の創始者であり、金本位制論者のラフリン（James L. Laughlin）⁽²⁹⁾は、金に比べて銀は市場価格が不安定なため通貨に向かないと考えたのである⁽³⁰⁾。ただし、ラフリンは金本

図2 純銀371.25グレインの市場価値



* Laughlin ([1896] 1898) p. 297のデータより作成。

図3 金銀市場比価の変化



* Laughlin ([1896] 1898) p. 294のデータより作成。

位制のみを主張しているわけではなく、条件が満たされた場合には国際複本位制も認めるという立場であった⁽³¹⁾。

5. 第2-11章における比喩

次に、第2章から第11章のあらましを提示し、そこから比喩されていることを考えてみよう。

(第2章) 家ごと美しい景色の国に墜落した。北の魔女がドロシーを魔法使いと思いあいさつにきた。なぜなら墜落した家が、マンチキンというこの国を支配していた東の悪い魔女をつぶしたからであった。北の魔女はドロシーに、東の魔女が履いていた(魔力をもつ)銀の靴⁽³²⁾を履くよう勧めた。ドロシーはカンザスに帰りたいと北の魔女にいうと、黄色いレンガの道に沿ってエメラルドの都に行き、魔法使いオズに頼むよう促される。

この章から銀の靴が出てくるが、これは第10章で出てくる緑色レンズのメガネ、第12章で出てくる金の帽子と並んで重要な小道具と考えられている。銀の靴は

銀本位制の比喩といえるのではないだろうか。また、エメラルドの都は金本位制の中心都市ワシントンDC、黄色いレンガの道は金本位制への道を暗示していると考えられている。ボームは、金本位法(Gold Standard Act)が制定された1900年にこの寓話を世に出すことに意味を見出したのかもしれない。

(第3-6章) ドロシーは数マイル行ったところのトウモロコシ畑でかかしに話かけられる。わらの詰まったかかしは頭脳が欲しいといい、魔法使いに頭脳をもらうためにドロシーに同行する。さらに森の中で全身ブリキの木こりに会う。木こりは心が欲しいと同行する。森を抜けるとライオンが飛び出してくる。この臆病なライオンは勇気をもらうために同行する。

これでドロシーの三人の同行者が登場した。一人目はわらの詰まったかかしで、デフレによる借金に苦しむ西部農民を比喩しているとされる。二人目はブリキの木こりで、失業した工業労働者を比喩しているとされる。三人目は臆病なライオンで、通常ブライアン⁽³³⁾の比喩であるとされている。ブライアンは、1896年の大統領選挙以降、宗旨替えしたかのように自由銀運動よりも反トラスト、反帝国主義運動に力を入れようとしたということを指して臆病としていると思われる⁽³⁴⁾。このように比喩をそれぞれの人物に当てはめると、まるで彼らが自由銀運動の一団のようにみえてくるからおもしろい。この一団はまた、1893年の有名なコクシーの軍隊(Coxey's Army)を思い起こさせる。それは失業した工業労働者が、全国からワシントンまで徒歩で行進するというものであった。

(第7-9章) ここから四人の旅が始まる。四人が溝、怪獣、川などの困難を乗り越えると、赤いポピー畑が一面に広がっている。ポピーの強烈な匂いは、それを吸った人を永久の眠りに就かせるが、四人は何とかそこから脱出する。

ここで、一面のポピー畑はアヘンを暗示している。そしてブライアンが陥ったように、その中にいると銀の問題を忘れてしまうという危険を比喩していると考えられよう。

(第10-11章) 一行の行く手にエメラルドをちりばめた門が現われ、門番はエメラルド宮殿に入るには緑色レンズのメガネをかけなくてはならないという。メガネには金の紐がついていて、それは頭の後ろで結ばれ鍵をかけられた。エメラルドの都では全員がメガネをしていたため、すべてが緑色に見えた。魔法使いオズの宮殿に滞在すること

になり、ドロシーは廊下を7つ抜け、階段を3つのぼった部屋に案内される。四人は魔法使いオズに謁見する。ドロシーはカンザスへの帰還、かかしは頭脳、木こりは心、ライオンは勇気が欲しいと頼むと、魔法使いオズは四人に西の魔女を殺してくることを交換条件にする。

ここで、エメラルド宮殿はホワイト・ハウスを比喻しているといわれている。さらに、緑色とはグリーン・バック紙幣の色を比喻しているのは明らかであろう。エメラルド宮殿ではグリーン・バックだけが流通し、緑色レンズが金の紐でつながれているのは、グリーン・バックが金との兌換紙幣となっているという暗示と考えられる。また、7つの廊下と3段の階段を通るということは、「1873年の犯罪」を比喻しているといわれている。

6. 第12-24章における比喩

最後に第12章から第24章までのあらましを提示し、そこから比喩されていることを考えてみよう。

(第12-14章) 四人は西をめざす。しかし黄色いウィンキーという人たちの住む国を支配している西の魔女に捕らえられる。西の魔女は金の帽子⁽³⁵⁾の魔力を使い果たしていたため、ドロシーの履く銀の靴の片方を奪う。しかし、ドロシーが水をかけると西の魔女は溶けてしまう。ウィンキーは歓喜してその日を祝日と定める。ドロシーは、銀の靴を取り戻し、持ち主がかわり魔力が回復した金の帽子をかぶる。ドロシーは、金の帽子の魔力を使って空飛ぶ猿を呼び出し、エメラルドの都へ運んでもらう。道中、空飛ぶ猿から金の帽子の由来をきく。

ここから四人の二回目の旅が始まる。ボームは、四人の二回目、三回目の旅に19世紀末の外国のことを組み込んだと推測されよう。

たとえば、二回目の旅に登場する黄色いウィンキーとは、フィリピン人を比喩していると考えられている。1898年の米西戦争でアメリカはスペインに勝利し、フィリピンを併合したことを暗示していると思われる。

また、空飛ぶ猿は平原インディアンを比喩しているといわれる⁽³⁶⁾。そして彼らから聞く金の帽子の持ち主の変遷は、金本位制がイギリスから始まり、アメリカまで渡ってきた経緯を比喩しているように思われる。ロックオフ (Hugh Rockoff) も、金の帽子を金本位制の比喩としている⁽³⁷⁾。

(第15-20章) エメラルドの都で魔法使いオズ

に謁見する。そこで、オズの正体は魔法使いではなく、オマハから気球でやってきた人物であるということがわかる。口のうまいオズは、かかし、木こり、ライオンに各々の望みは既に叶えられていると納得させる。ドロシーの望みを叶えるため、カンザスへオズと気球で行くことになる。しかし、オズだけが飛びたってしまい、ドロシーは帰る方法をきくためクワドロリンクの国を治める南の魔女のところへ行くことになる。ドロシーは、陶器の国、野獣の森などを通り抜け、南の魔女グリンドのもとへとたどりつく。

ここから四人の三回目の旅が始まる。ここでも外国の比喩が推測される。たとえば、陶器の国(原著では、章の題が *The Dainty China Country* となり、中では *china country* となっている⁽³⁸⁾) とは、アメリカ同様、銀の問題を抱えていた中国を比喩しているのではないだろうか。中国では19世紀末に造幣所が設立され銀ドル紙幣などが発行されたが、それ以外にも政府機関、昔から紙幣を発行してきた銭荘も紙幣を発行したし、外国から進出してきた商業銀行が銀ドル貨、銀オンス銀行券を発行するなど、紙幣発行者が乱立した。第二節で指摘したアメリカ同様、中国でも銀行券の分散発行は大きな問題であった。

(第21-24章) ドロシーはグリンドに金の帽子を渡して、帰る方法は銀の靴を3回、かかとを合わせて鳴らすことだと教えられる。グリンドは、金の帽子の魔力を使ってかかしをエメラルドの国へ、木こりをウィンキーの国へ、ライオンを野獣の国へ送り届けた。ドロシーはトトと一緒にカンザスに帰る。

ここでの比喩は、1896年の大統領選挙に敗れたことで自由銀運動の望みは絶たれ、農民、労働者、ブライアンは夢から覚めたという比喩と考えられよう。実際、これ以降自由銀運動は衰退していくのである。

7. 魔法使いオズ、東の魔女、西の魔女の比喩

以上、自由銀運動の比喩としての「オズの魔法使い」について、そのあらましに沿って考察した。ここで、主要人物ではあるが、その比喩について触れてこなかった三人について考えてみたい。それは魔法使いオズ、東の魔女、そして西の魔女である。

表2をみてほしい。ここでは、表1を作成する基となった学者たちの見解の違いを示している。

まず魔法使いオズの比喩についてみてみよう。魔法使いオズについては、大統領かその側近を比喩しているという意味では共通しているが、特定の人物をあげている場合と複数の人物をあげている場合に分かれて

表2 主要人物の比喩解釈

	アレン	リトルフィールド	パーカー	ロックオフ	ウィルソン
魔法使いオズ →	ハンナ?	グラント～ マッキンリー	金びか時代の 大統領	ハンナ	マッキンリー
東の魔女 →	——	実業家と銀行家	東の実業家と銀行家 or クリーブランド	クリーブランド	——
西の魔女 →	——	ハンナ or 銀行家	マッキンリー	マッキンリー	——

いる。ロックオフは、共和党の実力者で、マッキンリー大統領のブレーンでもあったハンナ（Marcus Hanna）をあげている。彼は、第11章での魔法使いオズのいう「何かをうるには代償がいる」⁽³⁹⁾というセリフから、大統領選挙に多額の資金を提供してマッキンリーを勝たせたハンナをオズと重ね合わせている⁽⁴⁰⁾。一方、複数の人物をあげているリトルフィールド（Henry M. Littlefield）は、グラントからマッキンリーをあげた根拠として、彼らはアメリカのリーダー・シップ基準を象徴しているからだとしている⁽⁴¹⁾。著者としては、魔法使いオズが四人の望みに対してうまくいくるめることから、オズはさらに一般化して大統領全般としてはどうかと思っている。

次に東の魔女の比喩についてみてみよう。東の魔女については、クリーブランド大統領を比喩しているとする見解と、実業家や銀行家を比喩しているとする見解に分かれている。リトルフィールドは、東の人々であるマンチキンを支配していたのであるから、東の魔女は実業家や銀行家の比喩であるとしている⁽⁴²⁾。しかし、この話のはじめに退場した人物と考え、1896年大統領選挙の候補者からもれたクリーブランドの比喩とした方が納得できよう。

最後に西の魔女の比喩についてみてみよう。西の魔女については、マッキンリー大統領を比喩しているという見解が多い。フィリピン人を比喩していると考えられるウィンキーを支配していたのが西の魔女だったからである⁽⁴³⁾。

おわりに

以上、「オズの魔法使い」における比喩を考察した。その結果、次の三点のことがいえるのではないだろうか。

第一に、19世紀末のアメリカ本位制論争では、金銀複本位制論者と金本位制論者間の論争という側面が目されるが、困窮生活の改善という願いから発生した自由銀運動と、それに対応する政府との論争という側面も考えるべきだろうということである。実際、債務の負担にあえぐ農民、労働者たちは、グリーン・バック運動が1880年代に衰退するや否や、次の自由銀運動に加わったのである。

第二に、「オズの魔法使い」は、本位制論争研究を

始める時、欠かせない資料となるのではないかということである。この話が自由銀運動の嵐を比喩し、加えて比喩がその時代の多くの登場人物におよぶため、「オズの魔法使い」を繰り返し読むことで当時の経済状況を疑似体験できるかもしれない。

第三に、「オズの魔法使い」に登場する主要人物のうち、誰を比喩しているか見解が分かれるものがあるということである。しかし、ボームの意図がすべて解明されるよりも、あいまいなところを残す方が作品として色褪せないことにつながるかもしれない。

一方、今後の課題としては、オズ・シリーズの他の作品を比較検討することがあげられよう。そこから新たな比喩が指摘できるかもしれない。

注

- (1) Friedman and Schwartz [1963] p. 117.
- (2) ラテン貨幣同盟、スカンジナビア貨幣同盟、ドイツ・オーストリア貨幣同盟、アングロアメリカ貨幣同盟案の内容や特徴などについては拙稿 [2002] を参照のこと。
- (3) 西川、松井 [1989] p. 8.
- (4) 金銀複本位制には交替本位制のほか、平行本位制、跛行本位制がある。金銀複本位制のメカニズムや特徴などについては拙稿 [2006] を参照のこと。
- (5) たとえば過大評価された金属が銀とすれば、銀地金を鋳造所へ持ち込み銀貨を手に入れ、それを過小評価された金貨に交換する。その金貨を外国金貨と交換して外国の市場で銀地金を購入すれば利益が生まれる。しかし、このような裁定取引は為替レートが変化するとともに終了する。
- (6) 19世紀アメリカの金銀比価の問題をグreshamの法則から説明する文献としては、Greenfield and Rockoff [1995] がある。
- (7) 19世紀末には金貨、銀貨の輸出入が問題を深刻化させた。Friedman and Schwartz [1963] p. 131.
- (8) Gouge ([1833] 1835) An Inquiry … pp. 34-35.
- (9) ジェボンズは自由銀行制度について、恐慌時には兌換できなくなるとことを指摘している。Jevons ([1875] 1920) pp. 230-231.
- (10) 西川、松井 [1989] p. 29.
- (11) Myers [1970] p. 177.
- (12) Redish [2000] pp. 221-225.
- (13) 「1873年の犯罪」については、Friedman [1990] が詳しい。
- (14) ボームは1891年までサウスダコタで地方紙の編集に携わったのち、シカゴで文筆活動に入り、1896年には新聞にマッキンリーの大統領就任を批判する詩を寄稿するなどしている。そして1900年に初めて寓話「オズの魔法使い」を発表した。

- (15) ここでいう先行研究とは、主に Allen [2001], Littlefield [1964], Parker [1994], Rockoff [1990], Wilson [2000] を指す。
- (16) 本稿では、政治的側面をほとんど扱わないが、「オズの魔法使い」をポピュリズム (populism) と結びつけて議論するものとしては、Littlefield [1964], Wilson [2000] pp. 100–104. などがある。また、アメリカ南部のポピュリズムについては大塚 [1980] が詳しい。
- (17) Littlefield [1964] p. 52. 彼は、Dorothy is Baum's Miss Everyman. であり、She is one of us. であるとしている。
- (18) Hicks [1931] p. 160.
- (19) Rockoff [1990] p. 754.
- (20) Kirkland [1961] p. 32.
- (21) グリーン・バック党は、1876年に企業家を大統領候補に擁立したのである。Kirkland [1961] p. 35.
- (22) 西川, 松井 [1989] p. 70.
- (23) 金本位制と金銀複本位制の国際的採否にかかわる貨幣会議の展開については、Nussbaum [1957] pp. 148–153が詳しい。
- (24) Myers [1970] pp. 214–215.
- (25) Wilson [2000] p. 109.
- (26) ブライアンは、1895年のシャーマン銀買上法の廃止時、雄弁な反対演説を行なったことで既にな有名であった。
- (27) ブライアンが1896年民主党大会の演説の中で、金本位制を金の十字架になぞらえて、労働者を金の十字架にはりつけてはいけな、と述べたことに由来するといわれる。
- (28) 1896年大統領選挙は、アメリカ史上もっとも激しい選挙の一つとされ、一般の投票率は80%近くに達し、得票率はマッキンリーが51%、ブライアンが47%という僅差であった。敗因は、サラリーマン化した労働者の票が得られなかったことがあげられている。そして二人の二度目の対決になった1900年大統領選挙では、米西戦争の勝利、1885年以来世界一となった工業に支えられた好景気などにより現職マッキンリーの圧勝となった。
- (29) ラフリンは、マッキンリー大統領の下でインディアナポリス金融委員会の報告書をまとめた。この報告書をもとに1900年の金本位法ができあがったといわれる。
- (30) レディッシュはこのような考え方は先入観からくるものであるとしている。Redish [2000] p. 234.
- (31) Chown [1994] pp. 101–102. で同様の指摘がなされている。
- (32) 映画では、銀の靴はルビーの靴に変更されている。
- (33) 当時、ポピュリストは政治家に奇妙なあだ名をつけたことが知られており、○○ライオンというものもあったという。Rockoff [1990] p. 748.
- (34) この裏には、1890年代に金の産出量が急増したため、銀を利用することの政治的意味が薄れたということがあったといわれている。Rockoff [1990] p. 748.
- (35) 映画では、金の帽子はほうきに変更されている。
- (36) Littlefield [1964] p. 55.
- (37) Rockoff [1990] p. 751.
- (38) Baum ([1900] 1987) p. 225, 234.
- (39) Baum ([1900] 1987) p. 128.
- (40) Rockoff [1990] p. 750.
- (41) Littlefield [1964] p. 54.
- (42) Littlefield [1964] p. 51.
- (43) 西の魔女の比喩とされたマッキンリーは、偶然とはいえ

1901年に無政府主義者によって暗殺された。

参考文献

- Allen, Larry [2001] *The Global Financial System 1750–2000*, Reaktion Books.
- Baum, L. Frank ([1900] 1987) *The Wonderful Wizard of Oz*, William Morrow and Co., Inc.
- Chown, John F. [1994] *A History of Money: From AD 800*, Routledge.
- Friedman, Milton [1990] 'The Crime of 1873', *Journal of Political Economy*, 98, no. 6.
- Friedman, M. and A. J. Schwartz [1963] *A Monetary History of the United States: 1867–1960*, Princeton University Press.
- Gouge, William M. ([1833] 1835) *A Short History of Paper-Money and Banking in the United States, and An Inquiry into the Principles of the American Banking System*, B. & S. Collins.
- Greenfield, R. and H. Rockoff [1995] Gresham's Law in Nineteenth Century America, *Journal of Money, Credit and Banking*, 24.
- Hicks, John D. [1931] *The Populist Revolt. A History of the Farmer's Alliance and the People's Party*, The University of Minnesota Press.
- Jevons, W. Stanley ([1875] 1920) *Money and the Mechanism of Exchange*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.
- Kirkland, Edward C. [1961] *Industry Comes of Age: Business, Labor, and Public Policy 1860–1897*, Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Laughlin, James L. ([1896] 1898) *The History of Bimetallism in the United States*, D. Appleton and Company.
- Littlefield, Henry M. [1964] 'The Wizard of Oz: Parable on Populism', *American Quarterly*, 16 (spring).
- Myers, Margaret G. [1970] *A Financial History of the United States*, Columbia University Press.
- Nussbaum, Arthur [1957] *A History of the Dollar*, Columbia University Press.
- Parker, David B. [1994] The Rise and Fall of the Wonderful Wizard of Oz as a "Parable on Populism", *Journal of The Georgia Association of Historians*, 15.
- Redish, Angera [2000] *Bimetallism: An Economic and Historical Analysis*, Cambridge University Press.
- Rockoff, Hugh [1990] 'The Wizard of Oz as a Monetary Allegory', *Journal of Political Economy*, 98, no. 4.
- Wilson, Ted [2000] *Battles for the Standard: Bimetallism and the Spread of the Gold Standard in the nineteenth Century*, Ashgate.
- 大塚秀之 [1980] 「南部のポピュリズム」鈴木圭介編『アメリカ独占資本主義』弘文堂.
- 西川純子, 松井和夫 [1989] 『アメリカ金融史』有斐閣.
- 松岡和人 [2002] 「ラテン通貨同盟の締結とアングロアメリカ通貨同盟案」『愛知教育大学研究報告』51輯, (人文・社会科学編).
- [2006] 「14世紀における西欧の金銀複本位制と為替レート決定」『愛知教育大学研究報告』55輯, (人文・社会科学編).

(2008年9月17日受理)